28.12.3 神戸新聞（朝）8・地域経済面

高校生ビジネスプラン

全国トップ10に県内2校
教育現場 起業に高い関心

日本政策金融公庫の「高校生ビジネスプラン・グランプリ」の参加校は、事業計画書を作成する段階で、同公庫の職員を迎えて起業のイロハを学ぶことができる。兵庫県内では、計画書の提出に至らなかった高校も含め、全国で最多の22校が指導を受けており、教育現場の関心の高さをうかがわせた。

（24面参照）

県立播磨農業高校（加西市）は、2年連続の参加で初めてトップ10に入り、念願の最終審査出場校「ファイナリスト」に決まった。

同校のプランは、前年度の最終審査会を東京で見学した際に、会場で知り合った沖縄県の高校と共同で作成。互いの地域の課題について意見交換し、小中学生向けの「食育」をテーマに決めた。

計画では、小中学校を販売先とする農業体験アプリを提案。子どもたちに農作物を育てる疑似体験をしてもらう一方、集めた資金を活用して実際に地元の耕作放棄地などで農作物を栽培する。

収穫した農作物の一部は、アプリの中で育てた子どもたちに届ける。残った農作物は、地域の農産品販売所などで販売。5年後に、売上高約1億7千万円を見込む事業計画に仕上げた。

代表の3年坂本康輔さん(17)は「ネットと農業、兵庫と沖縄、子どもと食を結ぶビジネスを目指した。最終審査で1位を取りたい」と話す。

一方、通信制・単位制の相生学院高校明石校（明石市）は、初参加でファイナリストに残った。

提案したのは「セミオーダー絵本」。同校では、2015年に、女子生徒らが、思いやりの大切さを伝える創作絵本「ベンチくん、どうしたの？」を出版。生徒らが福祉施設で朗読ボランティアなどを行っている。

この絵本をベースに、購入者の家族やペットが登場して絆を確かめ合う物語に仕上げ、販売するプラン。ホームページなどで購入者を募集。表紙には家族写真をあしらい、英語と点字が付くという。

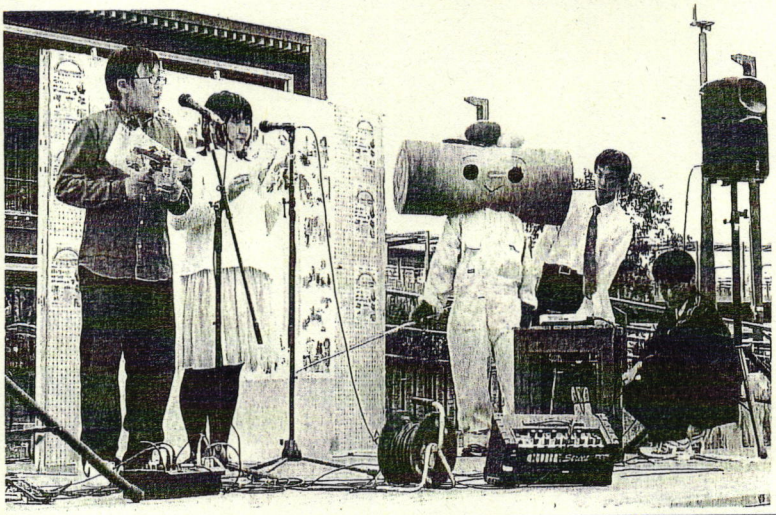
プラン作成のため、地元商工会議所の創業セミナーにも参加したといい、代表者の3年永江春輝さん(18)は「買う人の立場になって考える大事さを教わった」と話す。

明石校の尾池良一校長は、ビジネスプランの作成を通じて「社会と関わり、仲間や家族を守れる人になってほしい」と参加の狙いを語った。

（内田尚典）

播磨農業 食育考え農業体験アプリ
相生学院明石校 家族へセミオーダー絵本

農業を疑似体験するアプリの事業計画を作った県立播磨農業高校の生徒＝2日、加西市北条町東高室、播磨農高



ビジネスプランの土台にした絵本の朗読ライブをする相生学院高校明石校の生徒＝10月16日、JR姫路駅前

28.12.3 神戸新聞（朝）24・社会面

高校生ビジネスプラン・トップ10

相生学院明石と播磨農高を選出

県内初

政府系金融機関の日本政策金融公庫（東京）は2日、「高校生ビジネスプラン・グランプリ」の上位10校を発表し、兵庫県内から相生学院高校明石校（明石市）と県立播磨農業高校（加西市）の2校が選ばれた。県内からのトップ10入りは初めて。1月8日に東京大本郷キャンパスで開かれる最終審査会に出場する。

（8面に関連記事）

起業教育を広げようと2013年度に始まり、4回目。全国324校から計2662件の応募があった。県内からは、東京都（32校）に次ぐ20校が計210件を提出した。

全国トップ10に選ばれた相生学院明石は、子どもの誕生日や七五三など家族の記念日向けにセミオーダーの絵本を考案。播磨農は沖縄県の四つの高校と共同で、食育をテーマにタブレット端末で農業を疑似体験できるアプリを提案した。

生徒らは同公庫職員の出張授業を受けて、販路や収支を含む事業計画書をまとめた。最終審査会は口頭でのアピール力も試される。

（内田尚典）